〈国際交流〉

「同志社・アーモスト・サマープログラム」十周年にあたって

樋口秀雄

一九八八年、「同志社・アーモスト・サマープログラム」は十周年を迎えた。新島襄の母校として、同志社にとってはいわば象徴的な存在という印象が強かったアーモスト大学で、このプログラムが始まってから、学生三百人、教員二十名が一夏過したことになる。アーモスト大学はぐんと近い存在になった。

私が在外研究員としてはじめてアーモストに滞在したのはケーリさんの推めによるものであったが、一九七三年のこと。まだ日本人家族が珍しかったのか、小学校や婦人会などからよく話をしてくれと頼まれたりすることがあって、つい尻込みして妻に代理を頼むような頃だった。

確かこの年だったと思うが、文学部出身の小沢善雄さんの企画によるサマー・プログラムが実現し、同志社からの五十名程の学生と数名の教員がアーモスト大学に三週間程滞在した。私的な行事ではあったけれど、同志社からの団体が、比較的長期にこの大学に滞在したのはこの時が初めてのことだったと思う。画期的な出来事であった。

小沢さんは新島スカラーとしてアーモスト大学を卒業し、当時マサチューセッツ大学の講師であった。

このプログラムは発足後三年程で消滅したが、同志社大学による公式なプログラムは、ある意味でこの私的な企画にヒントを得て、これを受け継いだものであると言ってもいいだろうと思っている。

一九七三年当時の副学長はブロッサー・ギフォードさんであったが、彼の同志社とアーモストの友好発展への熱意は大変なものであった。ある時、「小沢さんの企画によるプログラムが、同志社やアーモストの名称を使っていることに対して、両方の大学から批判があるという噂を耳にするが、この際、両大学の正式協定によるプログラムを実施してみてはどうか」、という打診があった。準備その他考えただけでも容易なことではなかったから、そのうち同僚の先生方に相談しようと思ってその儘になっていた。

一九七六年だったと思うが、このプログラムのことが初めて発足間もない国際交流委員会で論じられ、アーモスト大学と公式に折衝することになった。丁度この年の夏、私はギフォードさんの招きで、生島吉造さんおよびもう一人の私の友人共々に約一カ月お宅で世話になった。公式に話し会うことの許可を得ていたから、かなり細かいことも話題にしたが、業者による海外旅行や体験プログラムとは異って、大学が卒業単位として認定するも

のにしてはどうか、というのが要点であったように思う。ビザのステータスは「留学」とすることで問題はなかったけれど、卒業単位として認定するためにはどの様なスケジュールがいいのかということについては見当がつかなかった。

国際交流委員会としても資料不足のために仲々適切な結論に達することが出来なかった。先ずは資料収集が必要ということで、大下教授、学事課の長合さん、そして私の三人が、東京および関西の主要大学に出張することになった。当時、既に東京の諸大学は事務局としての国際部を設置していてかなりの実績をあげていたけれど、大学が主催し、卒業単位として認定するサマープログラムを実施している大学は皆無であった。学生団体が主催するプログラムは二、三あったけれど、これは商業ベースでのものであったからあまり参考にならなかった。名称を「同志社・アーモスト・サマープログラム」とする、参加学生数を約三十名、引卒教員を二名とする、期間は夏期休暇中とすることなどを決定し、詳細は浅香教授を委員長とする実行委員会で検討することになった。

他に参考にすべきプログラムがなかったから戸惑いがちであったけれど、現地でのコーディネーターをレイ・モーア教授に依頼し、英語教員（三名）、学生アシスタント（二名）の公募と選定をおねがいすることになった。しかし、これは全くの強制といってもいいくらいの依頼であった。このプログラムの着想の時からモーア教授には何回となく意見を求め、一九七六年の夏にはマサチューセッツ大学の関係者を訪問し、念のためT・E・S・L（外国語としての英語教育）の有資格者リストを入手してはあったけれど、実際の選任となれば全てをモーア教授に頼らざるを得なかったのが実情であった。たったの二日間とはいえ、夏期休暇中のホスト・ファミリーの確保もまた困難な仕事であったけれど、これはアーモストの様な大学町では尚更のこと。マサチューセッツ大学のチャンセラー夫人のゲージさんがこのプログラムのためになれば、といってボランティアのリストをくださったのもこの様な事情によるものであった。

準備が整ったところで行った二回の説明会には、合計で百五十人程の学生が集った。選考は、筆記試験（英語）、日本語と英語による面接というかたちで実施したけれど、実際に応募したのは百名程であったように記憶している。選考の基準は必ずしも成績に重点を置くものではなく、学部や男女のバランスなども考慮することにした。第一回ということもあって、応募者は皆相当に緊張していた。当時は国際課やその専用掲示板がなかったから、上立売研究室の入口に合格者の掲示をしたけれど、これを見に来た学生の中には、自分の名前をみつけて万才を唱える者まで出る仕末であった。

具体的な授業運営や名所旧跡めぐりなどについては現地到着後考えることにしたけれど、なんといっても気掛りなのは、危険一杯のアメリカでいかにしたら学生の身の安全が確保出来るかということであった。業者の主催する観光旅行や研修旅行と違って、判断が全て引率教員に任せられる上に、冒険心の強い学生達のことである。若しものことを考えるとつい気が滅入ってしまうけれど、こんなことをくよくよ考えていたのではいつまでたってもプログラムの発足はむずかしい。中村春次助教授と私が第一回の引率者として出来る丈のことはやってみることになったのであ

る。幸いにして、判断に迷うような難かしい問題や事故は起らなかったし、この十年間にも起っていない。ときには緊急事態の発生によるホストファミリ辞退が起っても、現地到着後その補充に往生し、現地の友人や知人のおかげでなんとか切り抜けることが出来たようなこともあった。

周知のように、アーモストの町はボストンへ二時間、ニューヨークまで四時間、バスの便にめぐまれたところにある。朝早く出ればその日のうちに帰ることも無理ではない。ニューイングランドだから文学や歴史上の名所にはこと欠かない。これらを全て団体で巡ることは仲々難かしい。アーモスト大学滞在が四週間とはいえ、月曜日から金曜日の午前中はびっしり授業が行われ、十人一組であるから欠席するわけにはいかない。午後は自由といっても、遠くまで出掛けることは出来ない。土曜日、日曜日も少なくとも一回はホーム・ステイに空けておく必要がある。こんな環境の中で、学生が自分で計画を立てることも一つの貴重な経験になる。この種の経験の積み重ねによって、最近ではほとんど全てがスムースに運ぶようになったけれど、これは歴代のディレクターの先生方の努力のおかげであることは言うまでもない。

一九八四年、フィンク教授がディーンに任命された時、丁度私は日米友好基金の奨学金でアーモスト大学で研究中であったが、先ず聞かれたことは、このプログラムで改善すべき点は何か、ということであった。最初の二回程はモーア先生の好意にすがって実施出来たけれど、コーディネーターをアーモスト大学の関係者の中から選任してもらえないだろうか、というのがこちら側からの最も大きな要望であった、ある時は、コーディネーターを一般の応募者の中から選考し、現地での教員、学生アシスタントの依頼研修旅行計画などはその選任者に頼んで行っていたのだが、これらの業務を全て学生部が中心になって引き受けてくれることになったわけである。こちら側からの交渉も直接に行うことが出来るようになり、経費の面でも大きな節減が可能となった。これはわれわれにとっては大きな転換点であった。

こうして「同志社・アーモスト・サマープログラム」は軌道に乗ることになった。昨年はプログラムを開始して丁度十周年、A・K・P・の先例にならって、現地でレセプションをもち、一つの節目として関係者への謝意と、今後の協力をおねがいすることになった。パウンシー学長はじめ三十数名がアーモスト大学側からは出席したが、ギフォード夫妻もワシントンから車で駆けつけてくれた。同志社側からは、学長代理の文学部長浅香教授、科目代表としての私、それにこの年のディレクターの吉岡健一教授、森孝一助教授、アーモスト大学留学中の宮本英男教授、ハーバード滞在中の北垣教授が出席した。メニューや配席などについてはあらかじめ関係者と打合せておいたのだが、当日になるまで全く知らなかったのはデコレーションであった。部屋の入口には鳥居を模したアーチが組まれ、周囲は土のついたままの日本竹やもみじが配置され、中央では琴に代ってハープが奏でられていたのである。参加者からは一斉に感嘆の声がもれる程強烈な印象を与えるものであった。私の司会で、浅香教授の謝辞、パウンシー学長の挨拶、ギフォードさんの思い出話、モーア教授による両大学の今後の友好促進への展望が述べられたが、パウンシー学長は再度発言を求められ、この十周年記念レセ

ブションは大成功であった。十年は一つの節目である。来年からはA・K・P加盟校への長期留学制度も発足する。増々の発展を望んで止まない。

（大学法学部教授）

表紙のことば

研究室の私の部屋の窓をあけると有終館が眼に入ってくる。その煉瓦の色が美しい。円味のついた窓がこの建物をなんとなく優しくしているように思われる。雨の降っている時などいっそうこの感じが強い。机にむかっている人や書類を抱えている人の姿がみえる。その人たちに親しみを感じるのもこんな時だ。倦み疲れて有終館を眺めていると、人を懐かしく思う気持がほのかにわいてくる。

玉井敬之

（大学文学部教授）

慶応元年三月ワイルド・ロウヴァー号船上で作られた詩を明治一六年正月改めて浄書された。

（I）「不止月下併能越　跋渉八州是我分　壮図却促男児涙　滴々灑為縷々文」

明治二二年一二月新潟伝道に従事していた卒業生広津友信におくられた詩。

（J）「いしかねも透れかしとて一筋に　射る矢にこむる大丈夫の意地」

明治二三年一月五日「送歳の詩」と同様大磯百足屋で詠まれた和歌。

◎講入ご希望の方は左記へ、直接電話または文書でお申し込みください。

◎代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

◎製作日数の関係で、納品が一カ月程度遅れる場合があります。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入る
電話（〇七五）二五一―三〇三七・八

新島襄の掛軸の影本を頒布

同志社の創立者新島襄の書簡・色紙などの遺墨に接する機会は少なく、せめて複製された掛軸でも欲しいとのご要望に応えて、影本を、三点作成頒布しています。

この影本は、新島襄が元治元年、函館からの脱国に成功した後、航海日記に書きとめられた漢詩および明治二二年秋から二三年春にかけて、その心情を吐露された詩歌の遺墨の中から選んだもので、同志社関係者のみでなく、一般社会にも強く訴えるものがあると思います。

◎掛　軸（影本）

一幅　八、〇〇〇円（送料三五〇円）

（H）「男子決志馳千里　自嘗苦辛豈思家　却笑春風吹雨夜　枕頭尚夢故園花」

〈国際交流〉

同志社・マインツ・サマープログラム

勝　國興

大学の国際性のひとつのバロメーターである外国からの留学生受け入れで、同志社大学が必ずしも大きな役割を果たしていないというのが文部省の評価であると聞いてちょっと意外に思った。キリスト教主義の教育を理念とし、国際化を標榜するのが同志社の伝統であるはずだからである。近年急速に留学生の数が増えて来ているとはいえ、それでもなお留学生対策が他大学より遅れているとすれば、それは現在の同志社が自らの理念と伝統との発展に停滞を来していることの証左に他ならない。

しかしそのようななかでも、「同志社・アーモスト・サマープログラム」は今年度で十回目を迎え、着実に国際化の実績を積み重ねつつある。来年度からはＡＫＰの加盟大学への同志社大学から学生を派遣する留学制度がスタートする。昨夏新たに実施された「同志社・マインツ・サマープログラム」もこのような国際化の一翼を担うものである。その起りは、同志社大学と西ドイツ・マインツ大学の関係者の個人的な交流を前史として、一九八二年に当時の松山同志社大学長とハーダー・マインツ大学長との間に交された学術交流覚書にある。しかしその具体化への進展をみないまま数年が過ぎ、昨夏ようやくこのプログラムとなって実現したのである。プログラムの位置づけは、本学の教育計画のもとに、マインツ大学の協力をえて実施する学生の夏期研修講座とし、これをドイツの言語と文化を総合的に教授する通年六単位の一般教育の総合科目とすることにした。その際手本となったのは、アーモスト・サマープログラムを組み込んだ総合科目の「言語と文化」であった。科目名も先例に倣って「ドイツの言語と文化」とした。そして夏期のドイツでの現地研修をなかにはさんで、前期と後期の授業に「ドイツ語による理解力と表現力をいっそう高めるとともに、国際性豊かな人材の育成を目的とする」当プログラムの主旨に沿った専門分野からの講義を設定した。すなわち、泉尾洋行（商学部）＝「ドイツの言語」、川越　修（経済学部）＝「ドイツの社会と経済」、望田幸男（文学部）＝「ドイツの政治風土」、クラウス・シュペネマン（文学部）＝（ドイツ人の生活」、勝　國興（文学部）＝「ドイツの美術」の五つの柱で、各分担者は前期と後期にそれぞれ二ないし三回ずつ自分の専門の立場からドイツ論を講義することにした。七十名の応募者のなかから、マインツ大学より出題されたドイツ語のテストと同志社独自のレポート課題および面接試験によって選ば

れた二十名（男子6、女子14、2年生2、3年生13、4年生5）は、能力と意欲において優れた学生たちではあったが、大半が大学入学後に勉強をはじめた第2外国語のドイツ語の能力では多くの不安をかかえていた。シュペネマン先生によるドイツ語会話の特訓は、実に凄まじいものだったらしい。週に二回、昼間の授業が終ってからだっただけに、学生諸君もたいへんだっただろう。その効果はやがて発揮されることになる。

マインツ大学本部の建物

前期末試験終了日の翌七月二十三日（土）大阪国際空港を発ち、二十数時間かかってフランクフルト空港へ到着した。このはじめての試みで緊張するのはなにも学生だけではない。むしろ学生以上に緊張感を覚えたのは、引率者として同行することになったシュペネマン先生と私である。不眠の眼をこすりながら降り立った早朝の空港は、ルートが長くて暑い南回りだったせいか、少し肌寒くすら感じられた。出迎え不要と遠慮してあったにもかかわらず、マインツ大学側のプログラム企画責任者のヘツィウスさんとドイツ語授業の担当責任者カロラク先生とが秘書同伴で迎えて下さったのには恐縮した。早速大学が用意してあったバスで有名なアウトバーンを走り、三十分程でこの夏の戦場（？）となるマインツ大学へ到着した。この日は翌二十五日（月）からの授業に備えて休息できるかと思っていたら、すでに数日前に大学入りしている他二十カ国からの参加者と合同の昼食会が予定されているというので、長旅の疲れを押して出席することにした。恐らくこの時のわれわれの学生たちの心境は、出陣式への参列にも似たものではなかったかと想像している。同志社・マインツ・サマープログラムは、もともとマインツ大学が全世界からの個別の参加者のために従来から開いていた夏期の特別講座に、新たなパートナーとして同志社大学が加わったものであったから、今年も開講したばかりのセミナーへの参加者が一足早くマインツ入りしていて、われわれの到着を待つ形になっていたのである。だからこの日の昼食会は、彼らにとっては「日出づるところ」

折鶴を手に喜ぶバイヤーマン学長夫妻

からの未知の同僚たちを好奇の眼ではじめて実見できる機会でもあったのである。彼らも同じくドイツのことを学びに来てはいるものの、会話力にかけては日本人よりはるかに上

ハイデルベルクの古城を背景に

で、シンケン（ハム）もシュニッツェル（カツレツ）もはじめて聞くわれわれの学生たちの度肝を抜くには十分であった。興味深く話しかけて来る彼らのドイツ語の直撃にいった い何人の学生が応ええただろうか。多少の気後れのなかで迎えたこの初顔合せは、強烈な印象となってみんなの脳裏と心底に焼きついているに違いない。

授業のスケジュールは予想以上に厳しいものだった。八時三十分から三十分間の前夜のテレビ・ニュース・ビデオの視聴、九時からはコーヒー・ブレイクをはさんだ二コマのドイツ語の授業、午後も体憩をなかにした二回のドイツ語の授業。月火木金がほぼこの時間割の繰り返しで、夜は火曜日のドイツの歌の夕の他は、自由参加の映画会。水曜日は市内の諸施設見学、土曜日は日帰りの研修旅行。息を抜く間もない忙しさで、疲れも時差も取れないまま、体のリズムも狂ったまま、買い物や洗濯をする十分な時間もないままで、しばらく適応できず、体調を乱す学生が出て来たのも無理のないことであった。二週間程経った頃から、大学に申し出て少し手直しすることになったスケジュールのゆとりと言葉と生活への馴れが出て来て、次第に調子を取り戻し、友人たちの輪も急速に広がっていったようにみえた。大学側はきわめて親切で、授業の休憩時間中の飲み物や毎日の数社の新聞、寮生活用のベッド・シーツやタオルの週二回の洗濯等々すべて無料の提供だった。また市営のバス・電車をはじめ美術館や水泳プールなどの公共施設が無料で利用できるパス券の交付をマインツ市へ願い出て、これを全員に配布し、市当局はその上さらにライン川をはさんで隣合うヴィースバーデン市ともども、市長名で夏期講座参加者の歓迎会まで開催して下さったりで、その親善友好ぶりは至れり尽せりの感があった。この他マインツの大聖堂、第二ドイツ・テレビ放送局、マインツ貯蓄銀行本店、クップファーベルク・シャンパン醸造会社等の見学が続き、人口約二十万のマインツ市は瞬く間にわれわれのアト・ホームな町となっていった。

充実したマインツでのドイツ体験を一層押し広げたのが、土曜日ごとの日帰り研修旅行だった。ドイツ最古の歴史をもつ町トリーア、清潔な国際保養都市ヴィースバーデン、中世の修道院マリア・ラーハを経由してのボ

ン見学、名高い大学町ハイデルベルク――いずれからも忘れ難い鮮烈な印象を受けた。その他個人的なグループで訪れたオッペンハイムのゴシック聖堂の美しさやエバーバッハのシトー派修道院聖堂（映画「バラの名前」の撮影舞台となった）遺構の静寂さなどから、魂を洗われるような清らかな感銘を受けたのは私だけではなかっただろう。

研修旅行の圧巻は、なんといっても五日間のベルリン滞在であった。かつてのドイツの都は、現代の世界政治の矛盾が直接的な影を落す東西の狭間となっていて、目抜き通りのクーダムに弾痕も生々しく廃墟の姿で屹立する記念聖堂を毎日眺めながら、この眼で見、この足で尋ねてみたベルリンの壁や旧帝国議会議事堂やナチス犠牲者慰霊堂等は、戦争体験が風化しつつある日本人には、第二次世界大戦とその後の世界の生きた証言者に会う思いがした。「過去に目を閉じる者は、現実の社会に対しても盲目である」というヴァイツゼッカーの言葉に込められる意味を、学生たちはこのベルリン滞在の経験を通してもっともよく理解しえたのではないかと思う。

このプログラム最後のスケジュールは、ハノーバーとゲッティンゲンでのホーム・ステイだった。この時学生たちははじめて一人ひとりとなってドイツ人の家庭に入り、完全なドイツ生活を体験したのである。引率者二人がもっとも気をもんだ段階であった。しかし二週間後に再会した時の、自信に満ちた、一回り大きくさえなったような彼らの風格は、ことのすべてを語っていた。心配は杞憂に過ぎなかった。すでにふるさとになった感さえするマインツへ帰ってのドイツ最後の晩は、バイヤーマン学長をはじめ、ヘッィウス夫妻、ドイツ語の先生たち、学生チューター、それにシュピーラ教授等お世話になった方々を招いて、同志社と縁のできた大聖堂近くのワインシュトゥーベでの打ち上げパーティーとなった。充足感と解放感に似た気分のなかで、華やいだ笑い声とともに、ワイン・グラスとドイツ語の響きが夜遅くまで止むことなく続いた。

（大学文学部教授）

同志社談叢　第八号

論　文

新島襄とホランド……北垣宗治
「新島襄の函館脱出時の写真」について……桑嶋洋一
大正期の柏木義円……武　邦保
―その信仰と社会思想の底流を求めて―
明治中期における岩手県の基督者群像……高橋光夫
―相沢盾次牧師資料を中心として―

資　料

同志社会議録明治二十四年一月～同二十九年九月
『同志社談叢』既刊総目録
同志社社員会・理事会等記録
翻刻一覧
新島襄に関する文献ノート（その六）……河野仁昭

（頒価一、〇〇〇円）

発　行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課
電話（〇七五）二五一―三〇三七・八

〈国際交流〉

AKPと同志社

山下忠規

「AKPって何ですか」

と、私は時々きかれることがある。

「Associated Kyoto Program の略で、アメリカの大学の連合で、同志社大学でやっている留学生のプログラムです。」

と説明してあげる。

同志社内では、その創設以前から今まで献身的に貢献してくれた人々から、AKPにはあまり関心のない人々まで多種多様の人がいる。

私は、この多種多様の人々に、もう一度、AKPとは何かについて書いてみたいと思う。

A、つまりアソシェイテッドは、連合したという意味であるから、いくつかの大学が連合して出来ているということである。現在では、アーマスト、バックネル、カールトン、コルビー、コネチカット、ミドルベリ、マウントホリヨーク、オベリン、パモナ、スミス、ウエスリアン、ウィットマン、ウイリアムズの十三の大学の連合である。こう名前を連ねただけで、もう既にわかるように、この十三の大学は、学生数の比較的少ない、教養学課を中心とするカリキュラムのエリート校である。創設当時は、カールトン大学を例外として、全部ニューイングランド地方にある学校のみだった。今から約十年位前に、アメリカ全土を含む連合にする為に、アメリカ西海岸にあるウイットマン大学とパモナ大学の参加があった。連合の十三校の中で一番新しいのは、ミドルベリー大学で、つい去年から参加する事になった。丁度十年位前になるけれども、ハーヴァード、イェール、コーネル、ブラウン等の有名校が参加を希望してきたけれども、これらの大学は、学生数も多いし、大きな大学院をかかえる総合大学で、連合している大学とその性格が違うというので参加を断った。アメリカの大学制度の中で、これら連合の十三大学の様な小さな大学が果している役割は、今日でも非常に大きいし、またハーバードやイエール等の大大学に飲み込まれてしまう様な傾向は全くないことを一言つけ加えておきたい。最初にこの連合が出来上ったのは一九七二年で五つの大学だったが、今から十六年前で、今年のプログラムは十六回目だという事になる。今でこそ、経済大国の日本に留学生を受入れるプログラムが沢山ありすぎる程あるけれども、十六年前、ニクソンショック以前にこんなプログラムがあった事は注目に値すると思う。現在でも、日本留学生プログラムの優秀なものをあげてみろと言われたら、AKPがまずあがってくる事

は疑う余地がないと思う。

ＡＫＰの二番目のＫは、京都のＫである、そして、このプログラムが京都で行われている事、その受入れ側が京都にある同志社大学である事を意味している。東京こそ日本の首都であり、日本のあらゆる部門の中心地であるけれども、京都は東京にない、よい面が沢山あると思う。

まず第一に京都は古都であって、日本歴史をふりかえってみると、日本の首都であったのは、京都の方が東京よりずっと長い。それだからこそ、御所、修学院、二条城の様な首都の役目をはたした場所とか、又神社仏閣とか、庭園とか、名所旧蹟に恵まれている。ここで学ぶ留学生は、いながらにしてこの様な場所に囲まれて、この様な場所そのものから直接教えを受けることが出来る。

十二月のある土曜日の朝、前の夜から降った雪が積っていて、朝になってもまだ小雪がチラついていたのをよい事にして、大急ぎで金閣寺に出むいた。丁度その時小雪がふりしきり、雪の金閣寺をしばらくの間ぼんやりと眺めていた。これは京都のよさの一齣である。

又、京都というのは受入れ側の同志社の事である。御所と相国寺の間にはさまれた今出川キャンパスは、よい場所に位置しているすばらしい建物の立つキャンパスである。又、場所と建物のよさばかりではなく、その中にいる受入れ側になってくださる人々のよさでもある。創立者新島襄から、新入生の一学生にいたるまで、すべての人々が目を広く世界に向けている人々である。又、その人々の中の多くの人が何らかの事でこの十三の大学に関係があった人である。自分自身その大学に行って勉強した人もあれば、近いうちに行こうと思っている人もある。この十三大学の中のどこかの大学の卒業生が、外人教師として同志社で教え、自分の祖母がその先生の教えを受けたとか、その様な関係を掘り出してみたら本当に限りがないであろう。

特筆すべきは、十六年前からの歴代の総長、学長、教務部長等の尽力である。これ等の人々に、私や、その他のＡＫＰ関係者がお礼を言うと、いつも言はれるのは、「私一人では何も出来ないのです。皆の力が固ってなるのです。」と云う返事である。これにも或程度の真理があると思う。というのは、この様な役目を持っていない方々、他の教授の方々、職員の方々、学生諸君、皆さんによく受入れていただいている事は、事実である。今この紙面を通じて感謝の意を表しておきたい。

又、ＡＫＰの学生が反省会などでよく発言する事の中に、「同志社大学の学生と接触する機会が少ない。」というのがよくある。これも年によって違うし、その様な発言をする人の方にその本当の責任がある場合もある。しかし又或る程度の真理がここにもあるかもしれない。まづ第一に、ＡＫＰは九月に始って、五月に終り、同志社の学生は四月に始って、一月の上旬に終る。両方が重なるのは、九月から十二月までだけだと言える。それでも、九月はＡＫＰの学生はきたばかりで何もわからないし、十二月は学期末試験で忙しくて接触がない。それに言語の相違ということも大きな理由の一つである。ＡＫＰの学生は勉強のために日本語で話したいが、同志社の学生は同じ理由で英語で話したい。そうすれば両方とも言葉が下手で話にならないし、本当のコミニケーションが出来ていないということになる。

しかしよく考えてみれば、この様な困難があるからこそ、勉強が必要なのであって、この様な困難を通じて始めて国際交流の意味がわかってゆくのである。

同志社の教授のある方々は、ＡＫＰの学生をクラスに招き、学生と話をさせたり、教授自身がＡＫＰのクラスにお出かけ下さったりしている。この様なやり方は、今後も、大いに進めてゆきたいし、ＡＫＰの学生も喜んでいる様である。

最後にＡＫＰの最後のＰ、つまりプログラムの内容そのものについてふれてみたい。

十六年前の創設当時は、約二十名、最近は約五十名の学生がこの十三の連合の大学から毎年選ばれる。これも年によって随分差があるが、ある年は参加したい学生が沢山あって、厳しい書類選考や面接があって加入が難しい時もある。又ある年は、少なくて比較的に入り易い時もあり、定員にみたない時には、大きな問題がない限り参加を許可される。また、こんな年には、十三大学以外の大学からでも、希望者があれば許可を与えることもある。プログラムには毎年、この十三の大学の中の教授の一人が所長として選ばれる。この所長が書類選考と面接を行って学生を選び、その年のカリキュラムを作る。所長は毎年六月頃赴任して、京都にいるＡＫＰ職員と協力してホーム・ステイをしてくれる家庭を探したり、頼みに行ったりして夏を過す。学生は九月の始めに来日する。最初の二、三日は、オリエンテーションで日本の社会、家庭、生活様式等の説明を受けた後、ホーム・ステイの方々にオリエンテーションの場所にきていただいて、各家庭につれてゆかれる。次の週の月曜日から正式に授業が始まる。

授業の内容は、その約半分が日本語の授業で、これは毎日午前中に行はれる。あとの半分は日本文化、社会についての選択課目の講義やゼミナール等がある。歴史、宗教、文学の様な人文的な課目や、政治、経済、社会の様な社会科学的な課目もある。これらの課目の講師には、所長自身や、所長が選ぶ、英語で講義の出来る先生があたられる。最近五、六年の間に、日米友好基金等の援助で、アメリカの十三の大学の中から教師を送ってもらってこの様な講義をしてもらう制度が出来上っている。今年は、バックネル、カールトン、スミスの三つの大学から三人の先生が来ておられる。

プログラムで一番大切な要素はホーム・ステイである。学生はここでいちばん、日本の社会、家庭について学ぶことが多い様である。日本語が上手になるのも、ホーム・ステイだという学生も沢山いる。過去十六年間、沢山の方々がＡＫＰの為にホーム・ステイをして下さって、このプログラムに貢献して下さった。この方々にも深い感謝の意を表したい。

結語として、ＡＫＰはすばらしいプログラムで、皆さまのお陰でもっともっとよくなりつつある事を云って終りとしたい。

（マウントホリヨーク大学教授・ＡＫＰディレクター一九八八～八九年度）

〈国際交流〉

女子大学におけるサマープログラム

小泉利久

海外との交流は日常的になりつつある。今後日本人が生きてゆくためには、それは避けて通れない道であろう。女子大学がサマープログラム（以下海外夏期研修と略す）を持つようになったのもこの流れの一環だと考えてもよかろう。国のあり方自体が海外との交流を必要としているときに、これは単に流行の一端だとか、たった一カ月ぐらいの研修で英語力がそれほどつくとは思えないなどといって片付けてはしまえない意味を持っているのではなかろうかと私は思っている。同志社女子大学では、九年前に海外夏期研修を始め、その三年後からは、アメリカから学生を迎えて京都サマープログラムを行なっている。本稿では、その経過と現状を報告しておきたいと思う。

一　海外夏期研修

海外夏期研修が女子大学で本格的に検討されだしたのは一九七九年からである。海外での研修を行なうことについては、その前から話題にはなっていた。しかしその実現になるとためらいのほうが先に立ち、のびのびになっていたのである。それを実現に踏み切らせたのは、前年度学長になられた岡野久二前学長の熱意であったといえよう。早速学内に国際交流委員会が設けられ、本格的な検討に入った。委員長には現学長の石田章教授がなられた。対外的な行事を始めるときに最初の担当者というものは人には分かってもらえない苦心がある。そのときの石田委員長の苦労は現在の女子大学の海外交流の基礎となったといえよう。本学の学生を送るにふさわしい女子大五校（スミス、マウント・ホリョーク、コロラド女子大、スクリップス、メアリー・ボールドウイン）を選んだあと、一九七九年の夏に石田教授と竹村憲一助教授（当時）が一夏かけて現地の調査と交渉に渡米された。その調査結果に基づいて、慎重に審議をして、一八四二年創立のヴァージニア州の名門女子大学メアリー・ボールドウイン（以下ＭＢＣと略す）が学生を送るにもっともふさわしい大学と決定された。この選定の理由はいろいろあるが、学生数約六百名のこじんまりしたリベラル・アーツ・カレッジであり、キャンパスの美しさや学内施設は申し分なく、スタントンという人口二万余の町は治安状態と環境ともに良好であり、学生が一人でぶらぶら歩いていても何の心配もいらない町であるということが大きな理由であった。この地域は日本人との接触が比較的少なく、地理的には周辺

に多くの史跡があり、アメリカの歴史文化を知るうえできわめて便利な地であることも考慮に入れられた。もちろん、相手校ＭＢＣの本学に対する関心と対応が極めて熱意と誠意に充ちたものであったことも理由の一つである。

全体的なプログラムは三週間に及ぶＭＢＣでのキャンパス・スタディと一週間のホーム・ステイが中心になり、その前後にアメリカ各地の見学をはさみ、約一カ月あまりのものである。ＭＢＣでのプログラムは午前中三時間は能力別に分けた英語の授業が行なわれる。講義その他はすべてアメリカ人の教員によって行なわれる。午後はアメリカの文化文明についてのクラスがある。そして、週末にはヴァージニア州の史跡を見学する。出発前に史跡の歴史的意味その他についての講義が行なわれる。実に無駄のないプログラムが組まれている。見学地はウイリアムズ・バーグや第三代大統領トーマス・ジェファーソンの旧宅のあるモンティセロやエドガー・アラン・ポー博物館やヴァージニア博物館などである。時間があれば、週日でも牧場を見学したりして、現代のアメリカ理解にむすびつけようとする努力もなされる。

このプログラムは第一回から現在に至るまで大筋ではほとんど変りはない。スタントンに入ったあと、学生たちは大学の寮に宿泊することになる。アメリカの大学でも夏休みの時期である。したがって、キャンパスには同世代のアメリカの学生はだれもいないことになる。同世代の交流が全く出来ないのでは問題ではないかということで、ＭＢＣの学生をカウンセラーとして頼むことになっている。カウンセラーは本学の学生たちが授業を受けているとき以外はほとんど生活を共にする。要するに寝食を共にするわけである。最初は三人であったカウンセラーが八四年からは六人になっている。この交流は大変密接なもののようで、学生達が帰国したあとでも文通が続いている。いまでこそ若い世代の人達にとっては珍しくもないものになっているが、私が学生を連れていった頃には、エアロビクスはまだそれほど日本では一般的ではなかった。寮でカウンセラーたちがそれをよくしていた。最初はしりごみしていた学生たちはいつの間にかそれに参加するようになり、帰国する頃にはすっかりマスターしたようで、その後本学にもその同好会ができた。これは若い世代の交流がどのようなものであるかを示す一例になるであろう。

初めのほうで書いたように、高々一カ月の海外研修で英語力がそれほど伸びるとは思えないという疑問がこの種の計画によく持ち出される。それに対する完全な答を私は持ち合わせてはいないが、必ずしも否定的には考えていない。それは私が次のような例を見ているからである。私が連れていった学生達の中に、会話が苦手だという学生がいた。よく見ていると、スタントンに入った最初の頃にはこの学生はカウンセラーとも話をしないで、避けて歩いていた。授業が始まって二週間ほどして、ある家に私達全員が招待された。そこにはスタントンの人達も来ていて、学生達と交歓していたのだが、当の学生も老夫婦と話を始めていた。老夫婦は彼女に日本のことを聞いているようであったが、彼女のほうも実に熱心に答えていた。三人の話は約一時間ぐらい続いただろうか。私は驚くと同時に感心した。彼女の英語力が飛躍的に増したのだとは私には思えない。私達日本人が外国人と話をするとき、正確に話そうとして、かえっ

て言葉が出なくなる。外国人を余りにも意識しすぎるために起こる現象であろうが、その意識から抜け出せば、会話は意外とスムーズにゆくものだと思うのだが、彼女はその意識から抜け出したものであろう。これは大変意味のあることだと私には思える。

夏期研修に参加するほとんどの学生が帰国後に言うことは、自分たちが母国日本のことにどんなに無知であったかということである。恐らく、外国にいる間、彼女たちは絶えず自分たちが日本人であることを意識し続け、ホーム・ステイ先でも日本のことを質問され続けたのであろう。自分が何者であるのか、つまり自己のアイデンティティを意識させられたのであろう。MBCのキャンパスである学生がさかんに憤慨していた。どうしたのかときくと、日本にも猫はいるかとカウンセラーに聞かれたという。「日本を馬鹿にして。猫ぐらいいますといってやりました」とその学生はいきまいていた。ことの顛末はキャンパスに住みついた野良猫がかわいい子猫を生んだので、みんなでかわいがっているとその質問が飛び出したという訳である。カウンセラーが冗談に言ったことがそうではなくなったのである。それほど日本を意識する訳である。

一九八七年から、短期大学部長小田幸信教授のお骨折りで始まった英国ケンブリッジでの短大部夏期研修でも学生達の直面する問題は大同小異であろう。短期大学での夏期研修は、尾崎寔教授の御協力もあって、来年度からは場所を変えて、英国ウォーリック大学で行なわれる。

夏期研修で学生たちが直面する問題の一つ二つを取り上げてみたのであるが、これらはいずれもかなり大きな問題を含んでいる。それについての話は別の機会にしたいと思う。

二　京都サマープログラム

一九八三年以来、女子大学ではMBCの学生を隔年に迎えて、京都プログラムを行なっている。八三年は教授の交換も行なわれ、本学からは英文科の尾崎寔教授がMBCに日本語および日本文化の教授に行かれ、かわってMBCからはスザンヌ・ゲイ先生がみえた。

このプログラムは本学がMBCで行なっている英語の授業とアメリカ文化のコースを日本語と日本文化に置き換えたものといえる。午前中は日本語の授業で、午後に日本の文化についての講義と京都と奈良の史跡巡りが行なわれ、週末は広島見学が一回はいる。最後に一週間のホーム・ステイがある。宿舎は本学のみぎわ寮を使わせてもらった。時期は七月後半から八月後半約一ヵ月である。数名の寮生がカウンセラーとして働く。学生達のほとんどが日本は初めてで、カルチャーショックで悩む学生もいれば、難問奇問を発して寮生を苦しめるものもいるが、一ヵ月たつとほとんどが満足して帰るようである。このプログラムは本年で四回目を迎えるが、本年度からは時期が六月になる関係もあって、全期間ホーム・ステイで行なう予定である。現在までのところ、教職員その他の方々の協力を得て、このプログラムも順調に行なわれている。

（女子大学教授・国際交流委員長）